

日露戦争前夜に中央アジアを旅した日本人

——井上雅二『中央亜細亜旅行記』（一九〇三年刊）に寄せて——

稲 野 強

一 はじめに

本稿は、東洋学者・探検家として知られるハンガリー系ユダヤ人ヴァームベリー・アールミン（一八三二頃～一九一三）と彼と接触した明治期の日本人（ジャーナリスト、外交官、政治家など）との関係を探る筆者の日塊（日本・オーストリア）交流史に関する年来の研究の一環として位置づけられるものである。⁽¹⁾

これまで日本ではヴァームベリーはもっぱら東洋学者、中央アジアの冒険家として紹介されてきたが、筆者は彼と明治期の日本人との関わりを、両者が共通にもつ反ロシア（反露）姿勢の面から捉えてきた。そしてこの間の研究で明らかになったことは、日本人は彼の反露思想を、自らの反露姿勢の補強・強化に役立ててきたことである。日露戦争前にハンガリーのブダペストにヴァームベリーを訪ねた徳富蘇峰（二八六三～一九五七）もそうした一人であった。

実を言えば、本稿で取り上げる井上雅二（一八七七～一九四七）の中央アジア旅行に関する筆者の関心も、ヴァームベリーと日本人の関係・接触を調査していく過程で偶然浮上してきたものである。そのきっかけとなったのは、かつて筆者が行なった、明治期にドイツやオーストリアに留学した日本人学生の動向に関する調査であった。それにより一九〇一年（明治三四年）にウィーン大学に留学していた井上が、翌

〇二年八月に中央アジア旅行を敢行したことが判明した。⁽²⁾そこで筆者は、彼が、留学中になぜ中央アジアへの旅行を思い立ったのか、その動機を知りたく新たに調査を開始した。彼の決意に当時すでにヨーロッパでは中央アジア旅行の先駆者としてつとに知られるヴァームベリーが何らかの形で、関わった可能性があると推察したためである。

井上の伝記を書いた永見七郎によれば、井上はウィーンでヴァームベリーと親交があった、とされている。「ハンガリーのストラウス博士の如きはその権威者で、中亜問題に於けるバンベリー博士等もその雄たるもので、何れも彼が親しく交を結んだ大家である」と。⁽³⁾だが井上の自伝にはそのことが記されていず、井上自身が中央アジア旅行前に所用でブダペストを訪れた際に、ヴァームベリーから中央アジアの事情を聞きたかったが、折悪しく夏季休暇中で会えなかったということが、明らかにされている。⁽⁴⁾したがって親交があった、と見るのは早計であろう。ただし井上の『旅行記』にはヴァームベリーの見解が紹介されており、すでに準備期間中に中央アジアの知識をヴァームベリーの諸著作から得ていることは、井上の著作からも確認することができる。⁽⁵⁾

井上の中央アジア旅行は、日露戦争の二年前に日英同盟が締結され、日本人の主戦派がロシアに対して敵愾心を募らせ、戦争はやむなしとの立場をすでに鮮明にしている時期に行われた。彼も、そうした日本の政界・言論界（世論）の対露姿勢の影響下にあったであろうし、当然彼の旅行の動機も、ロシアの内情視察の性格が強かったことは、容易

に推察される。この時期に、これまで日本人が数名しか踏査したことのない中央アジアに、しかもすでに二〇世紀に入りイギリスとロシアの勢力範囲が確定されたといえ、ロシア政府がスパイの潜入に神経を尖らせているこの地に危険を冒してまで出かけるのには、動機・企画を含めて相応の覚悟がなければならなかったであろう。

本稿は、井上の中央アジア旅行の動機が、当時の日本にみながっていた対(反)ロシア観の表れのひとつであり、その実践活動であると推察し、彼のロシア観が、どのようにして育まれたかを明らかにし、あわせて彼の旅行自体を概略紹介し、これまで筆者が進めてきた日本人とヴァームベリーの関係の研究を補完するものである。

二 日本人と中央アジア

中央アジアは、一九世紀半ば以来、ヨーロッパの二大強国イギリスとロシアが激しく覇権争い、いわゆる「グレート・ゲーム」を演じていた地域である。一九世紀九〇年代までにイギリスは、ロシアとの間でイラン、アフガニスタンに国境線を引くことによって、かろうじて植民地帝国インドを防衛することができた。一方ロシアは、コーカンド汗国、ブハラ汗国、ヒヴァ汗国など西トルキスタン全体を併合した勢力を駆って、さらに東方の中国の新疆に向かい、チベットへの進出の機会を窺っていた。またシベリアから東方に向かったロシアはすでに、一九世紀半ば頃までには太平洋沿岸に達していたが、さらに中国東北部(満州)、朝鮮に進出しようとしていた。

近代日本が、東アジア情勢の推移に過敏に反応し、列強の中国蚕食に危機感を募らせるなか、中央アジアにおけるイギリスとロシアの勢力拡張の争い、とりわけロシアの動向に注目し、中央アジアを踏査した最初の日本人は駐ロシア代理公使西徳二郎(一八四七―一九二二)であった。彼は、一八八〇年に帰国する際に、ペテルブルクからトルキスタン、ブハラ、メルブを通して、戦略上の重要拠点であるイリに至

る大旅行を敢行した。また騎馬でシベリアを単独で横断して名を馳せた福島安正(一八五二―一九一九)は、陸軍大佐として一八九六年にペルシャ湾岸ブシル港からテヘランを通じて中央アジアに入った。さらに日露戦争後の一九〇七年に中国の西安からイリに潜入した日野強(一八六六―一九二〇)もいた。彼らの共通点は、外交官あるいは軍人という官の立場にある調査研究・情報収集ないしはスパイ活動で、しかも一様に壮年であった。ちなみにそれ以外に中央アジアに入った日本人には、西本願寺の若い新法主大谷光瑞(一八七六―一九四八)がいた。彼は、イギリス留学中にヨーロッパの中央アジア探検熱に触発されつつ、明治政府の強硬な廃仏毀釈によって衰退する日本仏教の復興のために、仏教伝来の痕跡をたどり、中央アジアの仏教遺跡を発掘調査するという、大志を抱いていた。彼とその一行の遺跡調査発掘は、日本で初めての学術的、しかも民間の調査であった。興味深いことに、井上は、旅の途中のブハラ(ウズベク)汗国のブハラ駅で、偶然にも大谷一行と遭遇している。

井上の中央アジア行は、大谷一行の学術的な調査旅行とは明らかに違う。彼の旅行の目的は、むしろ外交官・軍人といった官による西、福島、日野のそれと共通性をもつ(敵国)ロシアの調査・情報収集であった。そのなかであえて違いを示せば、井上の旅行は、表面的には偶然のチャンスを利用した物見遊山のな、おおらかな風を装いながらも、言わば思想的にアジア主義に目覚めた、まだ学生気分の抜けない二四歳の青年の、官によらない、私的なロシア占領・統治地域の内情視察ということであろう。いづれにせよ若い井上の行動は、日本人によって明治期に敢行された、さらに限定すれば日露戦争前の中央アジア踏査の数少ない貴重な体験のひとつと言える。現代における彼の評価は、中央アジア、シルクロード探検研究の第一人者金子民雄が好著『中央アジアに入った日本人』の中で、井上の中央アジア旅行についてわずかながら触れている次のような指摘からも確認できる。

「…このコースの詳細な記録は、日本人としては一九〇三年に訪れ

た井上雅二のものであろう。井上はコーカサスから中央アジアを訪れた初期のパイオニアの一人であった。」

三 井上雅二の生涯についての素描

今日、井上は、明治期の対ヨーロッパ関係から生まれた「亜細亜振興（興亜）」思想、いわゆるアジア主義の形成過程で、その思想の普及に中心的な役割を演じた東亜同文会およびそれが運営した東亜同文書院の設立に深く関与した人物として、また移民奨励者、海外殖民企業家、いわゆる南進論の実践者として、別の言葉で言えば日本帝国主义政策の尖兵として名をとどめている。本章では自伝、伝記、人名辞典などを手がかりに、今日ではもはや一般的には知られていない彼の生涯を多少冗漫ながらたどってみよう。彼のヨーロッパ留学、中央アジア旅行が彼の生涯のどのような位置にあるかを理解するためである。

(a) 荒尾精との出会い

井上（旧姓足立）雅二は一八七七年二月一日、兵庫県氷上郡神楽村字菅原に父足立多兵衛、母イトの次男として誕生。父親の英雄崇拜主義に鼓吹され、彼も将来は元帥・大将になることを夢に見て、より難関な海軍兵学校を目指す少年であった。彼は九一年九月に一四歳で上京して海軍予備校として有名な私立攻玉社に入学し、その傍ら神田の国民英学会で英語を学んだ。当時の彼の豪胆振りと成績優秀さを表すエピソードは数多くあるが、そのひとつが、海軍兵学校の応募で、戸籍を改訂して年齢を偽り、九三年二月に若干一五歳で、難関の江田島海軍兵学校の生徒になったことである。

日清戦争の始まった九四年、血気にはやる井上少年は、機関本位の教育方針や従軍して中国大陸に行くこともできぬ現状に不満を持ち、海軍機関学校を退学し、郷里に戻った。その翌九五年一月に船城村字山田の井上家の養子となり、同家の長女秀子と結婚した（妻、秀子「一

八七五〜一九六三」は後に日本女子大学の初代学長になるが、この結婚は「縁組をしたと云ふ程度で、楽しかる可き新婚の家庭生活も作ら」なかつたらしい）が、東京専門学校（後の早稲田大学）に入学して、政治経済を学ぶ目的で、再び上京する決意をした。ところが上京途中で偶然立ち寄った京都で、かねて名を知る「東方斎」荒尾精（一八五九〜一九六）を訪問したことが、彼の人生の転機となった。荒尾は、一八八六年に陸軍参謀本部支那部付で中国に渡り、商人に成りすまし、岸田吟香（一八四六〜一九〇四）が上海に作って、巨富を得た楽善堂という貿易会社を中心に中国各地の情報収集や調査に当たっていた。荒尾は三年後の八九年に帰国したが、その際に参謀本部に提出した「復命書」で、中国の実情は、単に中国ばかりか、「亜細亜危安に繋はる」ことであり、日本にとつても「手足の疾に非ずして実に腹心の疾」である。「近隣に国する者、豈に深く心を焉に留めざるべけんや」とし、そのために中国内部の「有為の士」と結び「非常の計画をなし」、「正々堂々の義兵」により清朝を打倒し、その後に新生中国と「友義を厚ふし、同心一致、以て東洋の勢いを興す」と指摘している。井上は、こうした荒尾の説く「同心一致」的、大同的・王道的な「興亜」思想、いわゆる初期のアジア主義に深く共鳴し、荒尾やその弟子から、同年三月から八月まで、「亜細亜の大勢」を知り、「国土」の道を学び、また経書、経済、中国語を学んだ。荒尾との出会いは、彼が「興亜」思想に目覚め、その実践・拡大に努める運動に没頭する決定的な契機となったといえる。この九五年一〇月に井上は、陸軍参謀本部で行われた中国語の試験に合格し、陸軍通訳として、台湾に渡った。初めての海外滞在である。翌年五月に東京専門学校で学ぶために帰国したが、経験豊かな履歴と成績優秀なために無試験で英語政治科への入学を許可された。七月にはかねてから希望していた中国の地に初めて足を踏み入れたのである。

(い) 「興亜」思想の実践

九七年から九八年にかけて、すなわち二〇から二二歳の学生時代は、

井上が「興亜」思想を、海外実地調査とアジア問題研究の団体作りへの参加という二面の実践活動に移す契機となった重要な時期である。九八年春、彼は中国問題の研究・討論を行う団体である東亜会の設立に関与した。¹⁷⁾

酒田正敏によれば、東亜会は、一八九八年春、進歩党系政治家、日本グループ、学生らによって作られた。井上は学生グループの指導者で、「明治三〇年春頃、東京専門学校の同窓生たちとともに、対外問題を研究する会を作り、毎週一回会合を開いて対外問題について研鑽をともにしたという。この会合では、当時論壇で東洋通としてもてはやされていた『東方策』の著者稲垣満次郎、シベリア横断で有名な福島安正陸軍少佐、あるいは進歩党の大正石巳ら呼んで話を聞いていたらしい。この会を『同人会』といったという。」こうした会が、合流して東亜会ができた。井上によれば、東亜会は政教社に事務所をおき、月刊機関誌『東亜細亜』を発行したという。また、「東亜会の趣旨とする所は日清両国の経済関係を密ならしめ、その基礎を強固にし、将来益々之れが発展拡張を期する為め、先づ特殊なる教育機関と通信機関を設けんとするにあつた」とあり、「日清同盟論」に基礎を置く活動と見て取れるが、活動の詳細は今もってわからないという。¹⁸⁾

東亜会の設立後に彼は中国の情勢を実地に調査するために、夏期休暇を利用し、矢継ぎ早に海外旅行に乗り出した。すなわち同年七月から一〇月までは東部シベリア、朝鮮および樺太(サハリン)、翌九八年の七月から一〇月までは中国北部、内蒙古(モンゴル)、朝鮮など東アジア一帯を視察している。一〇月には東亜会と同文会とが合併して、近衛篤磨(一八六三―一九〇四)¹⁹⁾を会長として東亜同文会が設立されたが、彼はその幹事に就任した。

同文会は、九八年六月に荒尾精が活動の拠点とした漢口楽善堂、日清貿易研究所関係者を中心とした門下生と近衛篤磨および近衛の経営する精神社系の合作によって設立された。²⁰⁾近衛は、九八年一月の雑誌『太陽』に論文「同人種同盟、附支那問題の研究の必要」を発表して、

日本のとるべき態度は、「決して妄りに自ら動て列国の政略に陥り、以て容易に支那に対する向背を決す可からず。今日の要は先づ支那問題を研究するに在り。之れを研究せむとせば、其政治家と有志家たるを問はず、宜しく支那に遊びて其国の上流社会に交際して両国の感情を融和せしめ、或は其内地を探検して風俗人情を察し、以て支那人を知り、支那の国勢を知る是なり。」と、中国研究と「日清同盟」の必要性を説いている。²¹⁾

この同文会と東亜会が合併して生まれたのが、東亜同文会であった。九八年一〇月二四日に両者の会合がもたれ、十一月二日、東亜同文会創立大会が、出席者三〇名で開かれ、会長には近衛が就任した。創立大会で議定された主意書では、次のように謳われている。

長い日本中国の關係は、古く、「文化相通じ風教相同じ。情を以てすれば即ち兄弟の親あり、勢を以てすれば則ち唇齒の形あり」という運命共同体であり、列強のように利害によって結ばれ、「朝婚夕冠互に相攘奪する者」のように結合・離反が容易に行われる軽薄な關係とは違ふ。前年には思いがけず不幸にも日清の兄弟が争う羽目になったが、それに乘じて列強が虎視眈々としていて、事態は急迫しているから、共に協力して、「外その侮を防ぐもの豈に今日の急に非ずや。」として日清相協力し、ことに当たるべきであり、「利を共にし、ますます隣誼を善くすべく、両国士大夫即ち中流の砥柱となり、須らく相交るに誠を以てし、大道を講明し、以て上を助け下を律し、同じく盛衰を致すべきなり。是れ我が東亜同文会を設くる所以なり。」と訴えている。²²⁾

井上は、九九年六月に東京専門学校英語政治科を卒業し、一〇月には新たに設立された東亜同文会の上海支部に派遣され、上海駐在員となり、たびたび中国中部を視察した。だが翌年一〇月帰国し、東亜同文会が経営する中国における日本人教育機関である東亜同文書院の創設に従事したのである。²³⁾

(5) 「欧州行」

さて本稿の主題である井上の中央アジア旅行に直接の契機を与えたのが、一九〇一年のオーストリア・ハンガリー帝国のウィーン大学への留学であった。時に井上、二四歳。彼は、三月に東亜同文会西部亜細亞特派員の囑託という肩書きをもち、日本を四月に発ち、インド洋経由でマルセイユからヨーロッパの土を踏んだ。ウィーンに滞在した彼は八月に、かねてから関心を抱いていたバルカン諸国を視察した。日英同盟の成立した翌〇二年の八月、彼は、ウィーンを発ち、中央アジア旅行に発し（旅程については、後段で述べる）、一〇月にベルリンに帰還した。そのまま当地に滞在し、翌〇三年四月までベルリン大学政治経済学科に在籍している。その後、彼はヨーロッパ、ロシアから東欧、シベリア、朝鮮を経由して一〇月に帰国するが、席を暖める間もなく一二月に直ちに韓国に向かい、日露戦争直前の翌〇四年一月に帰国した。この間、後に本稿の主題である『中央亜細亞旅行記』を徳富蘇峰が社長を務める東京民友社から出版している。

以上が井上の中央アジア旅行を敢行するに至る簡単な履歴である。彼のその後の人生行路についても、ついながら簡単に述べておこう。

(5) 植民地経営

井上は、一九〇四年の日露戦争勃発後は、東亜同文会韓国派遣員として朝鮮の日本語学校の監督および通信省韓国地況調査囑託となり、朝鮮で戦時特別任務に就いた。日露戦争直後の〇五年九月に韓国政府財政顧問附財務官に任ぜられて以降、韓国に滞在していたが、この間殖民事業の重要性を考えており、一時期就いていた宮内府の官職を辞した。日韓併合の年の一〇年にヨーロッパ各国の植民地商工業の調査のためにアメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジアの本国および植民地二八か国を視察する機会を得て、かねてから実行しようと考えていた海外植民地経営に乗り出したのである。

井上は、一九一一年に株式会社南亜公司を設立したのを皮切りに、

東南アジアや中南米諸国との間に殖民・移民事業を円滑にするための友好協会（南洋協会、日墨協会、日本蘭領印度協会など）を設立し、その理事・評議員におさまった。その一方で海外事業の会社を起こし（海外興業株式会社、秘露棉花株式会社、メキシコ産業株式会社、東洋殖植株式会社など）、その社長あるいは常務顧問となった。また海外殖民のために設立された海外高等実務学校、海外殖民学校などの校長なども歴任した。その間二四年から二八年まで衆議院議員に選出。さらに海外視察も精力的に行い、海外興事業地の確保のためにアメリカ大陸各地を視察した。第二次世界大戦時には四五年四月から八月まで東条内閣顧問を勤め、大東亜共栄圏の実現に指導的な役割を演じたのである。四七年六月二二日に死去。

以上見てきたように彼の後半生は、日本の大陸進出や植民地獲得・拡大政策に符号を合わせたように東アジアから中南米、東南アジアへの殖民事業の拡大に捧げられた。彼の海外事業は、典型的な南進論者として大東亜共栄圏を支えたが、欧米列強と連携した東アジア独立・解放運動を惹起させた第二次世界大戦での日本の敗北と共に潰え去っていったのである。

(6) ヨーロッパ留学の契機

では井上が、本格的にヨーロッパ留学を意識したのは、いつのことであったか。

荒尾の考えに忠実であった若い井上は、早稲田に入ったころから、ヨーロッパ留学を考えていたようであるが、荒尾の「君は余と同じく興亜を念願とす、宜しく先づ亜細亞を見て、欧羅巴荷及び、世界を見て然る後、事に興亜に従ふべし」と言う考えに忠実に従い、まず東アジアを知るから始め、アジア各地を歩いた。その間東アジア情勢は大きく変化していた。一九〇〇年の義和団事件後に、ロシアが、中国東北部から軍を引き上げなかったことが、三国干渉以来くすぶっていた日本の反ロシア姿勢の火に油を注ぐ役割をした。そうした主戦派

を中心とした反露的な風潮が、若い井上に、ヨーロッパ行きを急ぎ決意させた背景にあったと思われる。その間の事情については、自伝に次のようにあり、ヨーロッパ行きの傍証となりうるだろう。

「明治三十三年十月、筆者は東京に帰り、上海に設置する東亜同文書院の県費留学生の為、各県遊説の途に上った。…支那の実情より日支提携、東亜保全の為、留学生派遣の必要なことを熱心に提唱した。かくて翌年春、同文会から中西亜細亜特派員の肩書きを以て、欧航の途に上ったのである。当時、同文会では支部の名称を廃し、特派員を駐在せしめたのは上海、漢口、北京、福州、広東の五ヶ所に限られてゐたが、筆者を特に中西亜細亜特派員とされたのは、幹部の厚意ある措置であつた。当時、満州では日露、バルカンでは露土が対峙していた。仮に露国がバルカンを後にし満州を先にすれば、日露は開戦となり、バルカンを先決すれば、露土戦争となつて、満州問題は平和の中に推移す可きであつた。此の為めバルカン、トルコを始め近東、中亜、西亜を研究調査することは緊要な仕事である。近衛会長も嘗てウキン「ウィーン」に留学され、バルカンの研究をされたことがあるので、筆者にもそのことを勧められた。…」。

ところで、この引用にもあるように、井上は、東亜同文会会長の近衛がヨーロッパ留学を勧めた一人であつたというが、近衛の日記には、逆に井上が留学の希望がある旨を告げていることがわかる。「明治三十四年一月九日 面会…、井上雅二、農務省練習生として欧行したとの事藤田四郎牧朴真に紹介す²⁸」というのが、その根拠のひとつである。その後も出発前に、井上は近衛を訪れており、両者の親密振りを窺い知ることができる（一月十日 面会 井上雅二、「一月十四日、面会井上雅二、同人洋行の件に付」、「三月二十七日、面会、弥近々欧行するに付」、「四月十五日 面会、欧州行に付所々に添書を乞はしとの事」などを参照）。さらに「四月二十一日 面会 井上雅二 阪東信太郎井上に外国の紹介状を渡す」にはヨーロッパへの出発直前に井上が暇乞いに訪れたことが記されている。

さてウィーンに着いた井上は、公使館勤務の旧友小幡西吉（一八七三～一九四七）の出迎えを受け、八区のコッホガッセ一八に落ち着いた。当時の公使は牧野伸顕（一八六一～一九四九）であり、日記には、彼が留学中に何くれとなく公使夫妻の世話になっていたことが記されている²⁹。当時の井上のウィーンでの生活ぶりや考え方については、後に回顧談が寄せられ、また座談会が開かれた際に、牧野を始めとする大勢の関係者の発言で、明らかにされていて、興味深い³⁰。

四 出発準備

井上は、ウィーン大学留学中に、ある偶然の機会に中央アジア旅行を行うことになった。それは、彼が、転居した住居（一月三〇日に「ラザレット街一八」に）の隣にズデニェック・ホーフリヒターというオーストリア軍参謀本部の将校が住んでいていたからである。日記では、ホーフリヒターとの出会いについて、こう記している。

「明治三十五年一月十四日」主婦の紹介にて隣家の陸軍中尉ホーフリヒター氏と、毎日閑ある毎に共に散歩し、或は一室にありて英語と独語との交換練習をなす、即ち余は英語を教へ、中尉は独語を教ふるなり。これ大いに便利なり³¹。

ここではホーフリヒターが、一九〇一年の冬のある時井上に中央アジア旅行の計画を持ちかけたことが、旅行計画のきっかけであつた、とされている。偶然にしてはどうも話が上手過ぎると言えなくもなく、中央アジア旅行を視野に入れた井上はホーフリヒターに近づいたために、隣家に越してきたのではないかとの推量も成り立つが、今のところそれを裏付ける証拠はない。いずれにせよホーフリヒターは、ボヘミア（チェコの西部）生まれのチェコ系オーストリア人で、ロシア語も堪能、参謀本部地理課の将校となれば、井上の目の付け所がよいという他はなく、今なお政情不安なロシア領内を動くのにこれほど格好な道連れはいないであろう³²。さらに好都合なことに、急遽ザルツマン

という画家が発時から加わることになった。彼は、いわゆるロシア系ドイツ人で、故郷のコーカサス（カフカス）はグルジアの「チフリス」（トビリシ）に戻るから、一緒に行きたいと言う。彼のおかげで往々にして外国人を敵視する厳格な官憲とのトラブルも大いに緩和された。車中や路上で会った現地人や外国人との会話が弾み、貴重な情報興味深いエピソードが旅行記で生き生きと描写されているのも、彼らの「通訳」に拠るところが多かつたろう。この三人の旅行を称して、井上は、「日墮露珍三国同盟」と、三人で大いに笑ったと伝えている。

ところで井上は、旅費はどのように調達したのだろうか。旅費の出所がわかれば、旅行の目的あるいは大義名分が明らかになると思われるからである。だが残念ながら、今のところ国会図書館憲政資料室にある「井上雅二関係文書」にも外務省外交史料館所蔵文書にもさらにまた刊行されている東亜同文会資料にも、明確に井上の旅費支給を裏付ける資料を見出せない。ただ二月一〇日の日記には、牧野公使に旅行の件で相談に行った旨が記されているが、そこに次のようであり、大阪毎日新聞社が特派員の名目で、また陸軍参謀本部がロシア占領地域の実情調査の名目で、旅費を提供した可能性があると推察される。

「ホフリヒター中尉と先月来中亜旅行のプログラムを作り居りしが、中尉は愈々サルカンド迄旅行するに決したれば、余は之に就いて相談するの必要あるを感じ、牧野公使を訪ふて之を謀る。蓋し大阪毎日社より視察費を要求し、更に参謀本部に謀らんと欲してなり。公使快諾、小松原（英太郎）氏及び伊地知、福島両少将へ意見を具しやるべきの談あり。兎に角三日中に略々プログラムを公使の手許迄差出すこととなして辞し帰る。又参謀本部と関係あれば、飯田並に限少佐にも某意志を通じ置きたり……」³⁵

ちなみに旅費の工面に關して付言すれば、井上が留学中に財政的な支援を近衛に手紙で願っていることが、近衛の日記にあり（明治三十五年二月五日 来状 井上雅二 在維也納別紙）として〇二年一月一日付の井上の手紙が日記に添付されている、直接今回の旅行には触

れていないものの、近衛が、旅行費用の一部を用立てたとも考えられる。

その手紙で、井上は、「……出発の際閣下の御懇篤なる御示諭は銘肝致居候も、他に学費を得るの途直に相就き不申候に付、不得止北行可致、乍慮外御許宥奉仰候。猶研学の必要上今少し学費に余裕を作るの必要有之、事情許す可君場三十五年度より同文会の補助増加を請ひ申度、根津幹事長并に柏原幹事の許へ具陳致置候。閣下の御高慮を奉願候。明年度には諸方を探検旅行仕り度、此辺の件に就き学費支出の途有り之候へば、柏原氏等に御下問、伏して斯微志を為すに賛成あらんこと恐懼恐惶奉願候。……」と窮状を縷々訴えている。

このように明確な形で金銭的援助の有無は資料的に不明ながら、ウィーンの牧野公使や陸軍参謀本部のロシア占領地内の実情調査の密命を帯びたことは十分考えられ（大阪毎日新聞社とは当地から記事を送る契約を結んだのだろう）、伝記、自伝の中央アジア旅行に関する記述の表向きのおおらかさ、時には冒険物語風の面白さとは違い、彼の心情はかなり緊迫したものだったろう。

井上は〇二年の夏を期して、中央アジア旅行の計画を実行すべく、用意を整えた。彼は、その年の四月上旬からは毎週四時間、ウィーン在住のロシア人からロシア語会話の勉強を始めている。当地の事前知識に關して彼が言うには、政治軍事ないし外交財政の書物は官憲からきつと没収されるので、

「……到底之を携帯して途すがら読且味ふの快を取るべくもあらず、乃ち大学図書室に入つて多少の秩冊を涉猟し、過去現在の関係と状態に目を曝らして視察眼を肥やし、……」と当該地域の研究は怠りなかつた。

『旅行記』でも、ローリンソン、カーゾン、ヴァームベリー、「シユワルツ」「シユラー」「ブルルヂャー」、「ホールウォーズ」、「ブルネス」など多くの冒険家、研究者、政治家などの書いた書物を読んだ痕跡が示されている。

ところで、ここで問題が生じた。その春ワルシャワで軍の機密漏洩

事件があり、ロシア政府が神経を尖らせていることも背景にあつて、旅行・立入り区域が制限されていた。これにより彼が当初予定していた一般ルート以外の地域、つまりメルブからアフガニスタンの国境クシュクを経由して、ヘラットに至り、中央アジアの最東端駅「アンデシャン」からテレクダワン峠を越えて天山南路に入り、カシユガルに行くという、壮大な計画が挫折した。その代わりにペルシャ(イラン)を回る計画を入れ、旅券の申請をしたのである³⁸⁾。

五 『旅行記』より

(あ) 通信文の形式

さて一行がウィーンのノルド駅(現在、プラターシュテルン駅と併用)を出発したのが、八月一六日で、最終地のベルリン到着が一月六日。八三日間の旅行で、全行程は、一万五九二七キロメートルで、この間利用した交通手段は、汽車(一万二七八キロメートル)、汽船(二二八二)、騎馬(七九九)、郵便馬車(三八五)、馬車(三八四)であつた。滞在地と滞在日数は、カスベック(一日)、チフリス(二日)、タシケント(二日)、サマルカンド(一日)、ブハラ(四日)、メルブ(一日)、クラスノボドスク(二日)、テヘラン(五日)、タブリツ(二日)、エリワン(二日)、エチミヤジン(六日)、オデッサ(二日)、モスクワ(一三日)、サンクト・ペテルブルク(四日)の計四五日、その他は、野宿あるいは車中泊であつた。彼は次のように記す。

「……故に道途に在りしは差引き三十有八日、一日に平均すれば約四百二十[吉米「キロメートル」]を飛びし割合なり、或は維納「ウィーン」、ウラヂカウカサス間、クラスノボドスク、タシケント間の如き、各約三千吉米以上の長程を一気に直行せしとあり、或いはテヘラン、カスヴキン間の如き百八十吉米を荷車にて夜行せしとあり、体力の許す限り、石火電光の如く、大抵の都市は数時間乃至半日位にて見物了して前路を急ぎしなり、思へば忙はしき旅なりけるよ、……」³⁹⁾

八三日間で中央アジアを駆け巡る「電光石火」の旅ではあつたが、彼の『旅行記』には当時ほとんど日本では知られていない地域の重要な情報が満載されている。『旅行記』は通信文の形式をとり、第一信「高加索」「コーカサス」山中(八月二一日付)から第三信「伯林」「ベルリン」より(二月二〇日付)まであり、適宜まとめて記述している。さらに各々が目次(章と小見出し)の役割を果たしているため、全体のおおよその旅程と主題・内容がつかめることになっている。例えば、次のようである。

「第一信 高加索「コーカサス」山中より(八月二一日付)

発程||露国に入る||爾我の杯||明月||rostof市||クバン草原||西方哥薩克「カザーク(コサック)」の山来と廃滅||東方哥薩克の変遷||哥薩克の現状||夜の話||高加索山北の要鎮||驕馬高加索山を超へんとす||カスベック村||雪山に攀づ||

以下、列挙すると、「第二信 高加索の首府より(八月二十四日付)」、「第三信 布哈羅「ブハラ」汗国の都より」、「第四信 布哈羅汗国の都より(其二)」、「第五信 布哈羅汗国の都より(其三)」、「第六信 メルブの要鎮より(九月四日付)」、「第七信 裏海「カスピ海」東岸の一角より(九月八日付)」、「第八信 彼斯「ペルシア」の首都より(九月十八日付)」、「第九信 亜拉拉特「アララト」山下より」、「第十信 亜拉拉特山下より(其二)」、「第十一信 莫斯科「モスクワ」より(十月二十日付)」、「第十二信 聖彼得堡「サンクトペテルブルク」より(十一月二日付)」、「第十三信 伯林「ベルリン」より(十二月二十日付)」。

以上の通信文のうち、第一〇信までが中央アジア各地の詳細な見聞記になっている。

い) 内容から

井上には、この中央アジア旅行を敢行するまでに、台湾を皮切りにすでに数次にわたる中国を含む東アジア各地の辺境の調査旅行や留学中のバルカン、ドイツの旅行の経験があつた。そうした海外経験は、

生来の豪放磊落さと冒険心、目的意識、克己心、忍耐力、不屈な闘志、強靱な肉体、積極性、冷静さ、物怖じしない態度、命知らず、決断力、人当たりのよさ、あるいは風貌、ユーモアのセンスといった、異邦の地、辺境や人跡未踏の地に足を踏み入れるのに欠かせない氣質に磨きをかけたはずである。二四歳と思えぬ早熟の、明治期の冒険心あふれる青年の感性豊かで、しかも冷静な観察眼。もちろん壮士たる彼特有の豪言壮語と青年らしいむき出しの気負いが全編あふれているが。憲兵の取調べを受けた際の、次の感想も彼の辺境旅行に適した風貌・豪胆さ、ユーモアの資質を表している。

「…思ふに無智なる彼徒の目には洋服洋帽を着せるハイカラ土民と観ぜしならん、日本に在つては苟もすれば団匪の群に算せられんとしたる余、欧州に於手は猶更蛮勇の風采を免がれざりし余は、有難くも中亜に入つては立派（？）なる灰殻紳士なり、…」(第三信)。

また彼の冒険心と数々の経験が遺憾なく発揮されたのは、サマルカンドでウィーンに戻るホーフリヒターと別れて、単独で旅行を続けることになった後である。彼が、言葉の通じぬ「馬夫」と二人で、エルブルス山脈の難所を越えた場面がある。その時の難儀な様子をこう伝える。

「…民人蠢愚にして耕すを知らず、雑草茂るに委せ、道路と称す可ものなく、唯馬蹄の踏む所、草野の中自ら一条の道路様の者を形作れるのみ」で、案内人がいなければたちどころに道に迷つてしまふだろう。旅行の困難さは中国奥地より数段も上で、人口も稀薄だから、途中で食料も宿も調達することもできず、「纔に十露里毎位に路傍に小屋掛けをなして茶と果物を鬻げるあるを見る」。だからこの道を通る外国人はほとんどいず、「若し旅行せんとする者は張幕、食料の準備を整へて始めて発足するを例とす、余の如き孤剣飄然糧に敵に依り、あれば食ひなければ食はず底の遠征、大膽と云はゞ云ふべし、…」(第八信) さて井上は、文中で、中央アジアの多種多様な民族の特徴、訪れた汗国の歴史、出会った人を時には、厳しく、時にはユーモアたっぷり

に描いている。そのなかで彼が自発的にか参謀本部の「密命」によるのか、ロシアの野心、あるいは占領地に対するロシアの浸透程度、汗国の抵抗力の程度を明らかに意識して探っているのがわかる記述がある。以下で若干その個所を挙げてみる。井上の情勢分析の確かさ・感性の鋭さと旅の目的・課題の一端を推察できるからである。

まず井上は、ロシアの、いわゆる「南下政策」について、次のような現状分析を行う。

「此アスカバット、メシエツト間は…、今は一躍して鉄道を敷設せんとし、既に露政府の目論見中に在り、ゼースタン地方へ英国勢力の侵潤しつつあるの風聞専らなる、今日露国は必ずや此方面より南下するの機を逸せざるべく、火煙一空、国境を趣へてコーラサンの野に長蛇の駛るを見る蓋し遠き未来ならざるべきか、」(第三信)

「現陸相クロパトキンの」意見はコーラサン及アツエルバイヂャンと同様に此の二州の吞并は、印度に出んとするには是非共必要なりとなすに在り、カルゾンは此等の点より考察して、露国は如何にしても二州を閑却するものに非ずとの説をなし、セイル(故彼斯駐在英公使)も自己の意見を述べて、露国がギランに垂涎するは何れの方面より觀察するも 誠らしと云へり、味ふべきの言なり、」(第八信)

「案ずるに彼斯に於て、古より外侵を蒙る最も屢々なるは東北のコーラサンと西北のアツエルバイヂャンにして共に露が并吞に志ある地方なり…爾来小康を保ち来りしと雖も、今や露勢の南進する所、専ら此方面に勢力を 扶植しつつあり、一朝事あらば忽ち修羅の巷と化するはず此の方面なるべし、」(第一〇信)

一方、諸汗国でどの程度、ロシアの占領地政策が成功し、国民に支持されているかは、井上の重大な関心事であった。その点については、次のように觀察・分析している。

(サマルカンドで)「温和にして静肅なるは彼らの天性と見ゆ、寔に太平治め易きの民なり、試みに露政府の好悪如何と問ひし事屢々なりしが、皆云ふ太だ好しと、彼らは寔に露の治下経済の發達を見、財産

の安固を見て衷心嬉々たるなり」(第四信)

「露国の代表は、新布哈羅、即カガンの地に駐紮氏、監視の任に当たりつつあり、露国の紙幣及貨幣は到る所に流通し、布哈羅の銀貨テンガは露貨の十五哥「コペイカ」内外の相場なり、現今は一万一千、其中四千は首府に在り、訓練の模様は全く露国に倣ひたる者にして、一部の軍隊は露国の施條銃を携ふ、」(第五信)

「殊に最近数年間に於ける露の対波斯政策は着々其功を奏し、テヘランに於て独壇の技量を振ひつつあるのみならず、遠く波斯湾頭に迄其の巨手を伸ばさんとし、英の之に対する措置頗る緩慢、世論の刺撃により昨今稍々生色ありと雖も、露は既に波斯の財政と軍務に離るべからざる連鎖を有せるを以て勲章の贈与坏の微温手段にては到底此趨向を一転する能はざるべし、」(第九信)

また諸汗国にロシアに対する抵抗心があるかどうか、どうやら井上の関心事で、それは逆にロシアの浸透程度を判断する材料であった。それについては、こう言う。

「ヒヴァの）服装は露国軍隊に擬せるも、帽子は羊毛黒色なる土着の者を戴けり、要するに万余の不完全なる兵力露に反抗するに足らざるは固より明にして汗国の一装飾物たるに過ぎず」(第五信)

以上のような、細かな「敵情視察」は、井上の参謀本部への報告の強い意志を想像するならば、ありえることだが、やや意外なことに、彼が、日露戦争前夜の、しかも敵国の占領地域で出会ったロシア人あるいはロシアに対して個人的には決して敵意をむき出しにしていまいどころか、むしろ好意的であることである。若干、例としてそれを挙げてみよう。

「陸軍中将ドリンスキー、カスピ海洋上で）饒舌な將軍は年齒六十に近きが如きも、新に満州より帰国し、今回土耳其斯坦省の軍事裁判所長官として一人の家族をも伴はず、一名の従僕もなく、飄然としてタシケントへ赴任の途に在るものと知らる、態度極めて朴訥親み易きの一老漢なりき、」(第三信)

「メルブを上下とも深夜に通過するは露政府が斯く計り外客をして形勢を観察するを得ざらしむる為めなりと人は云へり、然れ共是れ必ず齋東野人の語ならん、堂々たる大国の態度、しかく児童に類するの事を敢てせざらん、余は帰途に於て下車を試みんのみ、」(第三信)。

「旅順発の電報に小松宮殿下は莫斯科より二週目を経ずして旅順に安着せられたりとあり、余は曾て殿下に謁したることありと、中佐中々の好人物にて独語を善くし相語る事多時、総じて露人は交際上手と聞きしが此男は蓋し其の中の一人歟」(第三信)

「サハロフ陸軍大将」は五五六の風姿堂々たる偉大漢なりしが、依りて思ふ、露国軍人輩が常此大漠の間を往来して剛健の氣を鍊るの機会多き到底山水紫明の安樂郷に生息せる本邦人の夢想する能はざる所、」(第八信)

上記の引用の例からは当時の井上には、日露戦争以後往々にして日本人の政治家、軍人、ジャーナリストに見られる、ロシアとロシア人に対して、大國意識から、見下すような、尊大な、侮蔑的な姿勢はない。彼のそうした姿勢、思想を端的に表わしているのが、次の「小さな愛国者」という興味深いエピソードである。

それは、黒海をバツームからオデッサまで航海した時の話である。

きっかけは、彼と同室のロシア人「肥大漢」が口を利かない。おそろく言葉が通じないからだろうと、彼は氣に留めなかった。だがこの「肥大漢」は、船中で知り合ったロシア人大学生に、日露は敵国同士で、井上は将来必ず軍人になるし、彼の中央アジア旅行も、日本政府の密命を帯びたものだろうから、親切にすべきでない、と告げたいらしい。またロシア人医師も、井上を刺殺する真似をし、自分は、「一旦変あらば互に刺殺して死せんのみ」と。井上は、四〇歳位の分別盛りの男たちの態度にあきれるが、日本にもこの類の「小なる愛国者」が少なくなく、あながち二人を笑えない、と思った。そこで井上は、次のように彼らに言ったという。

「露国にして政治的領土を東方に拡張する野心を撤回し、其門戸

を開いて我邦人の通商貿易を自由にさへすれば、日露は其東洋的な性質に於手自ら他の西欧諸国の根本的文化を異にする者に比して、一段和合し易きものあり、其の從來両国互に相忌む如き風あるは、支那文学の影響、歴史的事実の円滑ならざると、英文学の感化等幾多誤解を重ねる原因ありしに依る者にして、絶対的に両立すべからざるの理由あるや否やを究めず、漫に雷同して敵と云ひ讐と云ふは無識者の事なり、公等も愚者の為に倣はざるこそよけれ^④。」と。すると外国語ができないはずの件の「肥大漢」、打ち解けた様子で突如ドイツ語で話し始めた、と。(第二信)。

何しろ井上は、留学生仲間、自分は「宇宙を家とする」などと日頃から大言壮語する癖があり、多少誇張があるかもしれないが、上記のエピソードは当時いかに彼が公平無私な態度で、先入観にとらわれず物事を見、的確に判断していたかを証明している。逆に、敵国と敵国人に対するこうした冷静な観察眼のおかげで、この『旅行記』の叙述の信頼性が獲得できたのである。

六 結びに代えて

以上、本稿ではヴァームベリと明治期の日本人との関係を探る筆者の研究の過程で浮上してきた井上雅二と彼の中央アジア旅行の動機を探ってきた。そこで明らかになったことは、井上を敢えて危険な旅行に駆り立てたのはナシヨナリズムに燃え、アジア解放を夢見た青年の一途さであった、ということである。一言で言えば、井上の中央アジア旅行は、明治期の「国士・壮士」教育が作り上げたアジア主義の延長線にあったといえる。すなわち、中央アジア旅行の背景にあった彼の思想・行動は、少年時代の海軍軍人への憧れ、中国大陸への希求、それに思想性を与えた荒尾精との出会い、「興亜」思想研究のための東亜会、東亜同文会、その研究機関である東亜同文書院の設立関与、その教育・普及のための東アジア辺境への調査・研究などによって決定

的に育まれたといつてよい。そして長期間にわたる度々の調査旅行の経験は、中央アジア旅行にも徹底的に生かされ、英露の力関係、ロシアの野心、占領地でのロシアの慰撫政策、周辺諸国へのロシアの浸透の現状・将来に関する鋭い観察となつて現れた。そのなかで、ことにロシアの占領地政策に関する実態調査は、日露戦争以後井上が、後半生を費くことになる殖民、移民奨励事業に乗り出す上で、きわめて有意義であつたろう。残念ながら、日露戦争以後の井上の思想・行動の展開については、もはや本稿の対象を越えている。それに関しては、別の機会を設けたい。

本稿を閉じるに当たつて、井上の『旅行記』出版に祝辞を寄せた人の中から、国家的見地から本書の重要性を指摘した対露主戦派の「七博士」のひとりである東京帝国大学教授戸水寛人（一八六一—一九三五）の発言を紹介しておこう。ちなみに彼もどうやらヴァームベリの著作を読んでいた一人であつた。

「……之を一見すれば中央亜細亞波斯地方は我日本に直接の関係なき場所に候得共欧州列強が鹿を争ふ中原の一部分に御座候者、『クライヴ、バイガム』、『ブツクウォルター』、『シュラー』、『バンベリ』等色々の人物其地方に出掛けて実勢を研究致したること有之申候、而して欧州列強の一浮一沈悉く我日本に大関係あることに付日本人が其地方に旅行するは甚だ望ましきことに御座候折柄、貴君の如き膽大にして気豪而かも卓見明識の人物が其地方の実況を調査せられたること寔に国家の慶福に有之候、……」。

註

- (1) この研究に関しては、主として次の拙稿を参照のこと。「牧野伸顕と日露戦争(二)——彼の反黄禍論活動を中心に——」『群馬県立女子大学紀要』第八号、一九八八年三月、七一—八四頁、「『反露主義者』アールミン・ヴァームベリ」山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺——歴史論集——』ナウカ、一九九二年、三四—三三七頁、「日露

戦争前夜の日本人によるヴァームペリの反露思想の受容について」『平成七年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書』(課題番号〇七六〇三八九、一九九七年三月、「ヴァームペリ」尾形・加藤・樺山他編『歴史学事典』第五巻(歴史家とその作品)、一九九七年、六四一六五頁、「ウィーンの外交官と日露戦争」『歴史読本』新人物往来社、二〇〇四年四月、一六八―一七一頁。

(2) この件の調査に関しては、とりわけ同志社大学図書館同志社徳富記念文庫にお世話になった。紙面を借りてお礼を申し上げる。明治期の日本人海外留学生の動向に関しては、差し当たり次の資料を参照。手塚 晃(国立教育会館)編『幕末明治 海外渡航者総覧』第一巻(人物情報編)、柏書房、一九九二年。井上に關しては、その一二三―一二四頁を参照。また井上に関する最近の記事については、秦 郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、二〇〇二年、六三―六四頁、を参照。

(3) 永見七郎『世界を股にかけて 井上雅二氏の前半生』日本植民通信社、一九三二年、二二五頁。同じ著者による、井上の後半生を加えた伝記もある。『興亜一路 井上雅二』刀江書院、一九四二年、その二二九頁も参照。

(4) 井上雅二『中央亜細亜旅行記』東京民友社、一九〇三年。復刻本は『明治シルクロード探検紀行文集』第一七巻、ゆまに書房、一九八八年、所収。本稿では、その復刻本を使用した。ただし以下で使用する同書の引用頁はすべて原本に従い、『旅行記』と略記する。『…又関を獲て匈奴「ハンガリー」都ブダペストに赴き中亜問題に精通の評ある老儒バンベリ博士を訪ひたるも避暑中にて面会示教を受くるを得ざりしは遺憾なり…』六―七頁。なお福田宏年編『探検の記録』(現代日本記録全集 一五)、筑摩書房、一九七〇年に井上の同著が抄録されている。

(5) 井上『旅行記』の一三三、一四六、一五二頁にヴァームペリが登場している。

(5a) 井上は、旅行の出発前をこう回想している。『…勿論当時のこととして露西亞内地の旅行は取締り頗る嚴重にして、就中央亜細亜に入るには、露国陸軍省の特別な認可を要するのであった。携帯品

の如きも、一切刃物を携ふる事は勿論、参考書の如きものですら、動もすれば没収せらるるの虞があつて…』、井上『世界を家として』偉人と山水』博文社、一九二九年、六頁。ただし彼は、護身用に短銃を隠し持って入国した。

(6) 西の中央アジア踏査に関しては、金子民雄の精緻な次の研究を参照。『中央アジアに入った日本人』中公文庫、一九九二年。

(7) 福島中央アジア踏査に關しても、金子、同右、を参照。なお井上は、学生時代に福島のもとで国際情勢に関する勉強会を行っていた。

(8) 同右、二七―四二八頁の「日野 強」の項を参照。

(9) 大谷の中央アジア調査に關しては、金子『西域 探検の世紀』岩波新書、二〇〇二年、に詳しい。長沢和俊編『シルクロード探検』白水社(西域探検紀行全集)9、一九六六年、も参照。

(10) 長沢編、同右、で、渡辺哲信『西域旅行記』が、大谷と井上の出会いに触れている。『…思いがけなくトルキスタンの停車場で、東邦協会の井上雅二という人にあつた』二二頁。深田久弥も同右「解説」三九〇頁で、より詳しく両者の出会いを述べている。

(11) 金子、前掲、『中央アジアに入った日本人』、二二二頁。深田も、長沢編、前掲、で「井上にもその旅行記があり、数少ないわが国の中央アジア探検記録のひとつに挙げられている。」と、評価している。三九〇頁。

(12) 井上の伝記、人名辞典に關しては、本稿の註(2)(3)を参照。自伝は、いくつかあるが、『興亜五十年の阪を攀ちて』(非売品)発行所不明、一九四四年、がもっとも包括的である。

(13) 永見、前掲、『世界を股にかけて…』六七頁。

(14) 荒尾に關しては、井上が書いた伝記(復刻版)、東亜同文書院瀕友同窓会編『巨人 荒尾精』大空社、一九九七年(原本、佐久良書房刊、一九一〇年)があるが、次を参照。栗田尚弥『上海 東亜同文書院一日中を架けんとした男たち』新人物往来社、一九九三年、一八一―三七頁。岸田吟香や楽善堂に關しては、藤田佳久『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』(愛知大学文学会叢書V)、大明堂、二〇〇〇年、を参照。

- (15) 引用は、栗田、前掲、二九—三〇頁。
- (16) 永見、前掲、『世界を股にかけて：』七〇頁。
- (17) 東亜会を含むアジア主義の思想団体の形成に関しては、包括的で優れた分析を行った次の著書から多大の示唆を受けた。酒井正敏『近代日本における対外硬運動の研究』東京大学出版会、一九七八年。
- (18) 同右、一一頁。
- (19) 東亜同文会に関しては、この会の基本的で網羅的な資料、東亜文化研究所編『東亜同文会史』霞山会、一九八八年、を特に参照のこと。
- (20) 近衛に関しては、栗田、前掲、六五—九四頁、山本茂樹『近衛篤磨—その明治国家観とアジア観—』二〇〇一年、ミネルヴァ書房、さらに酒井、前掲、を参照。ここでは、酒井、一一四頁を参照。
- (21) 近衛の論文については、前掲、『東亜同文会史』一八一頁を参照。東亜同文会の主意書については、同右、三三頁から引用。
- (22) 井上が東亜同文書院留学生募集のために国内を巡回した様子がわかる文書がある。次の外務省外交史料館文書『東亜同文会関係雑纂』（ファイル、三・一〇・二—一三）を参照。
- (23) 井上の肩書きに関しては、永見、前掲、二〇五頁を参照。
- (24) 井上の、後半生の履歴に関しては、主として永見、前掲、『世界を股にかけて……』の巻末年譜によった。
- (25) 井上、『亜細亜中原の風雲を望んで』五頁。
- (26) 井上、前掲、『興亜五十年の……』四六—四七頁。なお以下の文中の「」は筆者の現代語訳。
- (27) 『近衛篤磨日記』鹿島研究所出版会、一九六八—六九年、第四巻、六頁を参照。
- (28) 井上の日記の引用は、永見、前掲、二一四頁。
- (29) 井上、前掲、『世界を家として……』とくに「其の頃を語る」九五—一三八頁、「曾遊座談会（昭和四年一月十四日）」一四〇—一八七頁を参照。
- (30) ここでは、永見、前掲、二二六頁。
- (31) ホーフリヒターは、「……ボヘミヤの出身でチェツク族であつて、参謀本部の地理課に勤務し、地理学の造詣深く、就中、露西亞、中央アジア方面に就いての研究頗る深いものがあつた」。井上、『世界を家として……』五頁。
- (32) 画家のザルツマンは、先祖がドイツのヴェルテンベルク出身のプロテスタントで、一九世紀の初めに宗教上の迫害にあつて、コーカサスに移住したという。ホーフリヒターの妻が、ドイツのミュンヘンで絵画を学んでいた当時の同級生だったらしい。同右、井上、五—六頁。
- (33) 国会図書館憲政資料室蔵の井上関係文書のうちマイクロフィルム（第二リール）「日記」（明治三三年五月から三六年二月）、外務省外交史料館文書『東亜同文会報告書（上海ノ部）』（ファイル、一・六・一・三一—一七）および「東亜同文会上海駐在ノ部」（一・六・一・三一—一三）および前掲、『東亜同文会史』などを参照。
- (34) 永見、前掲。引用文中の小松原英太郎は大阪毎日新聞社社長。
- (35) 前掲、『近衛篤磨日記』第五巻、二四—二五頁。
- (36) 井上『旅行記』三頁。
- (37) 同右、四頁。
- (38) 同右、四四—四五頁。
- (39) 同右、四五一頁。
- (40) ロシアの浸透に関しては、「第一〇信」のイギリス総領事の見方も参照。同右、三三〇頁。
- (41) 同右、三八九—三九〇頁。
- (42) 同右、二—三頁。
- (43)